

# 知的障害者における自己決定に関わる学習プログラムの検討

Key word : 知的障害 自己決定 問題解決

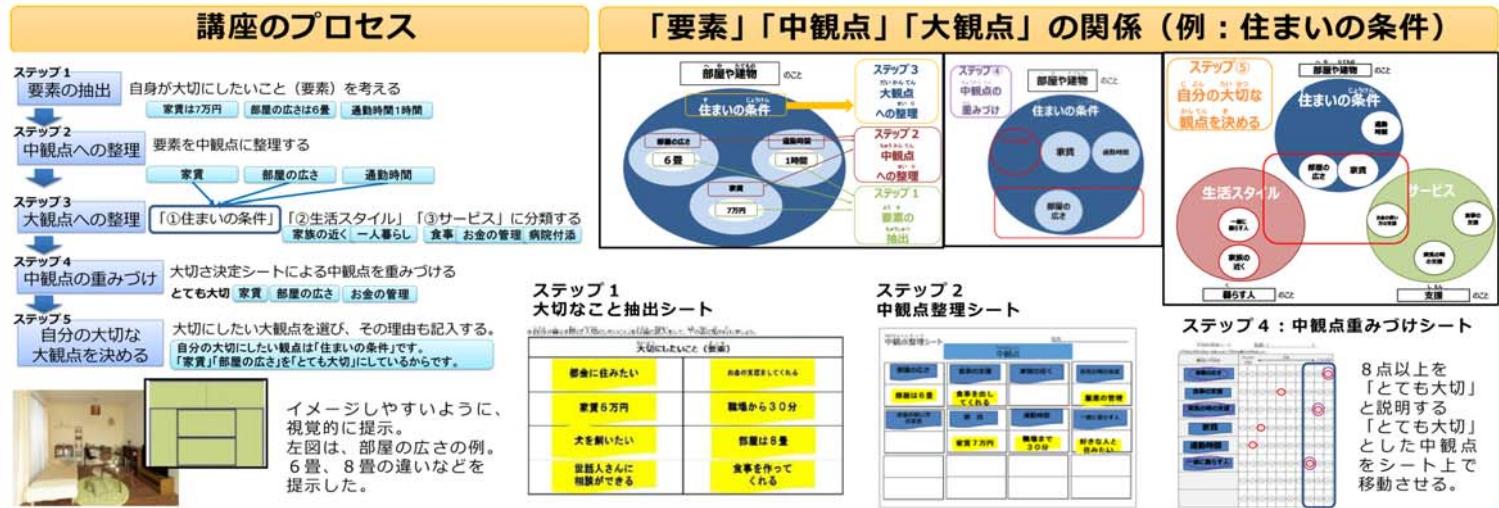
## 目的

2003年の支援費制度の導入以降、成人期知的障害者に対する近年のキーワードとして、自己決定が挙げられている。Wehmeyer,et.al(1996),Miller,et.al(2015)などは自己決定には問題解決能力が関係するとしているため、適切な自己決定に向けて問題解決能力の形成が必要であると言える。しかし、わが国では自己決定という概念が近年になり重要視されたことも関係し、「自己決定に関わる能力」、特に問題解決能力の形成に向けた学習方法とその支援方法に関する実証的研究はまだほとんど行われていないことが課題とされている(手島,2003;與那嶺ら,2010)。

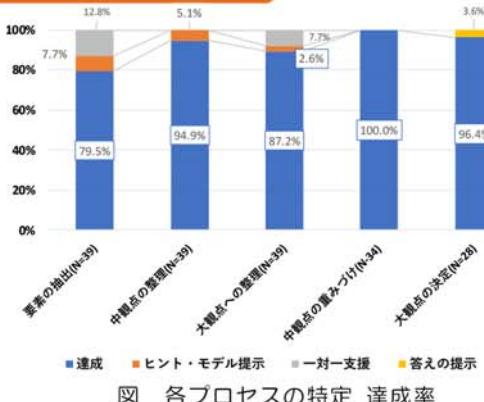
以上より本研究では、知的障害者に対する自己決定に関わる学習プログラムの作成・実施を通して、知的障害者の自己決定における問題解決能力の形成に向けた支援方法について検討することを目的とする。学習プログラムは申請者が運営に携わる成人期知的障害者の生涯学習支援の取り組みであるオープンカレッジ東京(東京学芸大学)において行うものとする。

## 学習プログラムについて

- 対象者**: 成人期知的障害者 39名であった。
- 講座の目標**: 問題解決能力の一つである「(選択肢を比較する)観点の抽出」に限定し、「住まいの場の選択」を題材とした。  
 (1)既習内容を基に、住まいの場を選択する際に大切なこと(要素)を抽出する。  
 (2)住まいの場の選択する上で大切なこと(要素)を整理し、観点を抽出する。  
 (3)住まいの場の選択に必要な観点を重みづけ、住まいの場を選択するまでの自己理解を深める。
- 講座のプロセス**: 「住まいの場を選択する観点」は多様であるため、住まいの場を選択する際に大切なこと(要素)を抽出し、要素をグループ化した「中観点」、さらに他者に説明する際に必要な「大観点」にまとめて、自らの「住まいの場を選択する観点」を整理した。その後、自分が特に必要と感じる中観点を選択し(重みをつけ)、それらを基に、自分の大切な大観点を説明した。講座のプロセスと「大切なこと(要素)」「中観点」「大観点」の関係は以下の通りである。



## 結果と考察



「達成」「ヒント・モデル提示」「一対一支援」「答えの提示」の支援段階を設定。

**【要素の抽出】**: 8割近くが達成。「部屋の広さ」等の観点を提示すれば(ヒント提示)、自らの考えを記入することが可能。

**【中観点の整理】**: 対象者の多くが達成。要素をグループ化することが困難とされる知的障害者も、講義方法、ワークシートの工夫で可能となる。

**【大観点の整理】**: 「住まいの条件」「生活スタイル」「サービス」という言葉を、講師が設定しているため、理解に時間がかかったものの、一対一支援まで含めれば、対象者全員が可能。

**【中観点の重みづけ】**: 対象者全員が可能。観点それぞれの理解度の測定は今後の課題。

**【大観点の決定】**: 重みづけによる大観点の選択多くの対象者が達成。重みづけした中観点と大観点の関係を理解していた。

今後は、今回決定した「住まいの場を選択する観点」を基に、実際の住居や住居スタイル(グループホーム・一人暮らし等)を選択する機会を設定することが必要である

## 今後期待できる効果

自己決定の際に重要なのは、複数の選択肢とそれを比較するための複数の観点である。知的障害者は選択に必要な比較の観点を自ら抽出することが困難であるとされている(今枝ら,2017)。適切な自己決定、特に住まいの場の選択のように多くの観点が含まれる場合は、自ら観点を抽出したり、整理したりする学習が必要になると言える。今後は、知的障害特別支援学校高等部でこうした学習が位置付けられることが期待される他、進路選択にも応用されることが望まれる。